

一隅を照らす

福島県

富岡町少年剣道団

中学3年 小林 凜太郎

今年、中学三年生になり、一人での活動も三年目である。富岡町少年剣道団の団員は増えることなく、僕一人。道場の看板を背負っての団体戦への出場はもちろんない。個人戦への出場が一度だけ。大好きな富剣のワッペンをついた剣道着に袖を通し、名札をつけ、「狂事徳成」と刻まれた手ぬぐいをつけて試合に臨んだのはこの一度。これまでの集大成となるべき年にしたいと思っていたが、もう終わりなのだと寂しい気持ちがこみ上げる。僕一人で何ができるのだろう。このまま何もできずに終わってしまうのだろうか。「それは嫌だ。」どうしたらいいのだろうと考えていたとき、ふと、父から聞いたことを思い出した。「一人ひとりが努力して、小さくてもキラキラ輝く人がたくさん集まったら、その光が広がって楽しく素晴らしい世界になるんだよ。」

と、僕に話してくれたことがあった。急いでなんの話だったかを父にたずねた。

「それは、『一隅を照らす』という話だよ。」

と教えてくれた。父も館長先生から教えていただいて大好きになった言葉だったという。幼い僕にもわかるように話してくれたことだったのだ。

「どういうこと？」

と聞く僕に、父は改めて話してくれた。

『一隅を照らす』それは、いわゆる世の中の隅っこ、日の当たりにくい暗い所や片隅という意味ではなく、自分の与えられた環境の中で、精一杯力を尽くして自らが光り輝き、周りを照らしていくこと。その積み重ねが世の中を明るく照らすことにつながる。話を聞いて、「これだ」と思った。僕の担う役割は小さいけれど、『一隅を照らす』人になれるようにしよう。集大成という形にはならないかもしれないけれど、富剣で剣道を続けていたからこそできることがあるはず。それはなんだろうと考えを巡らす。

そういえば、先日、中学校の部活で新潟遠征へ行ったときに、新潟の中学校の保護者の方から、

「去年の東北大会で体験発表をした富剣の小林君だよ。三度の飯よりの。作文も発表もとても良かったよ。」

と、声をかけられた。びっくりした。たった一度、あの場所で発表しただけだったのに、半年以上たった今でも覚えていてくれた。そのときの僕にはうれしい気持ちしかなかったけれど、もしかしたら、これも「一隅を照らす」ということなのかもしれないと思った。

僕の剣道に対する

思いや考えを発表して、それを聴いたその人の心に響いたのなら、周りを照らすことがで

きたと言えと思ったからだ。

そう考えると、富剣で剣道の技術より大切だと最初に教わった、明るく元気に自分からあいさつをする。はっきりと返事をする。履き物をそろえる。時を守る。場を清める。ということをしかりと実行していれば、「一隅を照らす」ことにつながるのではないだろうか。その姿を見たり、聞いたりした人が気持ち良いと感じ、自分もしてみようという人が増えれば、きっと素晴らしい世の中になるだろう。僕のできることが見つかった。これなら僕一人でもやれる。問題は、ついつい楽な方へと流れてしまい、できていないときもあることだ。弱い心に勝たなくてはならない。いつでもどこでもという気持ちを強くもって行動し、あかりを灯したい。

自分のできることを続けていけば、小さな力でも誰かの光になれる。その光が誰かとつながり、大きく広がったとき、僕は大きな喜びを感じることができるようだろう。剣道をやっていて良かったと心から思えるだろう。誰かが見ていなくても、誰も気付かなくても今、このときを大切にし、小さく光り輝き続けたい。